

母親が感じる育児上の「困難」に関する研究（1）

—幼稚園と保育園における調査から—

窪 龍 子

実践女子大学人間社会学部

井 狩 芳 子

和泉短期大学児童福祉学科

I. 問題と目的

鯨岡（2002）は、育児をするということは＜育てられる者＞から＜育てる者＞への転換であり、＜育てる者＞は子どもと共に生きるという今までにない大きな喜びを得るが、その過程は平坦な道のりではなくコペルニクスの転回と言えるほどの一大転換であるという。

さらに鯨岡は、今日の日本において育児が困難になったのは、社会構造の変化にも原因があることを指摘した。日本人は、高度経済成長によって物質的に豊かになり、周りに依存せずに家族単位で自立的な生活が可能になると、共同体的な繋がりを疎ましく感じるようになって共同体のしがらみを切り離すようになった。しかし、それは「共に生きる」という精神を見失うことであり、共同体的援助のもとで営まれてきた出産や育児が、核家族内部での営みに押し込められて、出産や育児を難しいものにしたというのである。

1. ＜育てる者＞になることの難しさ

鯨岡は、「育てる」とは、子どもを一個の主体としていくことであり、子ども自身が世界を生きるのは自分自身なのだという感覚を育てていくところにその究極の意味があるとして、以下のよう述べている。

人間は社会の中に生きるという人間の本质と、人間は子どもとして育てられながら、いずれは大人になる運命にあるという生き物の宿命から、多様な両義性（自己矛盾性）を抱え、それらが「育てる一育てられる」という関係を大きく揺さぶっている。

＜育てる者＞は、わが子に対して「あなたはあなたらしくあれ」と「あなたはみんなのなかの一員であれ」という両立の難しいメッセージを伝えているのだが、＜育てられる者＞と＜育てる者＞の双方に特有の自己性があり、それぞれに自己性の変容が生じる。

このような＜育てられる者＞から＜育てる者＞への転換の難しさを、鯨岡は、次のように分析しまとめている。

(1) 社会の状況

- ① 出産が「計画通り」「思い通り」になされるようになると、育児も親の「思い通り」にしようとする。そのとき、親は社会で求められている価値観に引きずられ、子どもの発達のテンポが速いかどうか、子どもの能力が平均よりも上かどうかということに目が行きがちになる。また、その成果が＜育てる者＝親＞の評価になるため、子どもは追い詰められる。
- ② 世の中に「発達」という概念が広まって、発達を全面的に肯定的なものとみなし、「よりよい発達」という考え方が子どもの負の面を締め出すことになった。子どもは美しい言葉や良いことだけで語られるようになり、少しでもはみ出す子どもは「いけない子ども」とみなされてしまう。
- ③ 現代社会では、各自が自己の欲望を最大限に充足してこそ幸せになれるのだと錯覚していることが多い。＜育てる者＞は、自らの欲望の何割かを割かなければ、＜育てる者＞として成熟していくことはできないし、子どもを愛する構えには立てないということに気付きにくい。

(2) 母親の状況

- ① 子どもを産んだ母親が、無我夢中で育児に当たっていると、いつの間にか自分が主たる養育者になり、共同責任者であるはずの父親は自分と平等に関わっていないことに気付く。そこにイライラが生じる。
- ② 子どもが泣いたりむずかったりする負の状態のとき、それをそのまま黙って抱えじっとしばらく付き合うしかないという状況がある。これは、＜育てられる者＞だった時には、何か問題に直面すると「原因を取り除いて問題を解決する」という方法を用いてきたのだが、それでは対処できない初めての体験となる。
- ③ 子どもが負の状態のとき、いつでもうまく対応できるわけではなく、「なぜ自分だけが」という思いにとらわれることがある。それは、誰からもサポートを得られなかったり、自分の思い通りのペースで育児を運ぼうとしてうまくいかなかったり、メディアに登場する明るいだけの子どものイメージに惑わされていたりすることによる。

(3) 子どもの状況

- ① 子どもの自信や意欲につながる自己性が形づくられるのは、まわりの大人たちとの心的な関係においてである。関係性の発達を必要としている。
- ② 子どもは、＜育てる者＞の社会化の働きかけに対して、「自ら進んで受け入れる」面と、「否応なく課せられる」という面の両方をもつ。

(4) 親と子の関係

- ① 乳幼児に限らず、人間は誰でも自分の「思い通り」を通したい存在である。乳児がその「思い通り」を実現させるためには、周りの者の援助を絶対的に必要とするのに、あくま

でも自分の「思い通り」を貫こうと＜育てる者＞を振回す。しかし、＜育てる者＞も一個の主体であり、乳児と同じように「自己充実欲求」につき動かされている。

- ② ＜育てる者＞は、子どもが一個の主体として発する気持ちを受けとめることができても、実際にはそのまま受け入れることができないとき「それはしてほしくない」と伝えなければならない。その伝達は、子どもが一個の主体としてあり続けたままで子ども自身に受け入れられるというかたちでなければならない。ここに＜育てる者＞の対応の最も難しい局面がある。
- ③ 幼児期には、子どもを一個の主体と認めても「しつけ」が必要になってくると、子どもの主体性を重んじて、やりたいようにやらせるのが良いのか、どこまで禁止や制止を加えるべきなのかという迷いが生じる。つまり両義的な対応を迫られるのだが、そこにマニュアルを求める気持ちが生じ、自分の育児は正しいのかどうかという観点から育児をするようになる。そうすると育児を楽しめなくなり、その葛藤は子どもへと跳ね返る。
- ④ 社会や文化は時代と共に変容していくので、大人と子どもは、常に同じ方向を向いた幸せな関係であるとは限らず、時に真正面から対峙する関係にもなり得る。「育てる－育てられる」関係は、構造的には世代間でリサイクルするものでありながら、完全なリサイクルにはなり得ない。育児の難しさは、その構造にも根ざしている。

(5) 育児の両義性の解決

- ① ＜育てる者＞は、子どもの幸せを願って自分を子どもに与え、子どもの喜びを自分の喜びにしていく。それは自己犠牲のようにみえて、子どものいないときには経験できなかった幸せや満足を経験できる。これが「育てる」ことの最も根幹の部分である。
- ② ＜育てる者＞は、自分の欲求を一時棚上げにしたり後回しにしたりせざるをえない。育児上で生じるイライラは、＜育てる者＞としての自覚と責任感によって乗り越えることができる。
- ③ 子どもが負の状態のときの解決には、子どもを一個の主体と受けとめ、子どものペースに合わせることができるかどうかが鍵になる。困難ではあるが、子どもの気持ちを受けとめ、子どもに寄り添い、子どもと共にそこにあり続けることで、＜育てる者＞は人間的な強さを得る。
- ④ 子どもは＜育てる者＞に育てられながら自ら育ち、＜育てる者＞は子どもが自ら育つのを受けとめることによって、育てるということを実現させる。
- ⑤ 育児に完璧を求めるのではなく、「ほどよい」ところで十分とわかることが＜育てる者＞としての成熟である。

2. 「しつけ」の是非

長谷川（2005）は、臨床心理学の立場から多くの事例に関わった結果、著書『お母さんはしつけをしないで』を出版した。その主張は、次のような内容である。

社会問題となった子どもの犯罪事例に関わった経験から、「しつけ」は「危険な良い子」と「非行少年」を生む。子どもに強力な「しつけ」を行なうと、親の前では光の部分の「よい子」を演じ、そうではない影の部分は親の目には見せないという極端な二面性を育ててしまう。しかし、それはいつか爆発してしまっ取り返しのできない事態を招いている。少年鑑別所へ送られた少年の調査でも、彼らは決して甘やかされてはおらず、親から一方的に叱られるなどの「厳しいしつけ」を受けて育っている者が多い。

さらに、長期間にわたる「社会的ひきこもり」は、幼児期から馴染んだ、指示に従うだけだった一方向のコミュニケーション（しつけ）に原因がある。受身の状態だけだと社会では通用しないため、多様な人々と交流することが苦しくなるのである。

最近「家庭の教育力が低下している」というが、それは「しつけ不足」とは異なる。多様な教育力のバランスが崩れて、一方的な親子関係へ偏り、結果として「しつけ過多」の状況を生み出している。少子化の状態にある今日、子どもは自分らしく育つ環境、つまり放っておかれることがなくなった。母親は、よく育てて当たり前と評価されるために、子どもに失敗を許さない。子どもがいろいろできるようになるまでには時間がかかるものだが、子どもは大人に包囲された環境下で、「愛情」「義務」「教育」「しつけ」といった名目のもとに監視、誘導され、管理の中で適応しなければならない。その中で最も無難な生き方が「大人の期待を察知して、それに応える」というやり方だ。

長谷川も、大切なことは母親から「強制されない」ことを通じて、ありのままの自分を受け入れることによって自尊心が培われ、安定的な人格の土台が形成されることが大切であると指摘している。

一方で、石川（2007）は、昨今の日本における育児の現状について、『モンスター・マザー 世界は「わたし」でまわっている』という著書で、多くの主婦を取材し、子育て中の母親が二極化していることを報告している。一方は、子どもが公共の場でどんなにはた迷惑な振る舞いをしていても、我関せずとばかりにヘラヘラしている母親、他方は、人目も憚らず、些細なことで怒鳴り、子どもに罰を与え追い詰めている母親である。

3. 本研究の課題と目的

子どもの主体性と社会性のバランスよく両立できるように育てられればよいが、鯨岡の指摘するように、「ほどよい」育児の実現は、母親自身が自らを律することも含まれており、易しいことではないと思われる。

日本の社会は、個人の主体性よりも日本的な社会性、すなわち自己主張をせず、他者との和を保つことを優先する社会である。母親がその価値観に引きずられているだろうことは予想できるし、長谷川は、その結果としてのしつけが強制的なものに傾斜していることを指摘しているのである。石川は、それに加えて母親自身が社会性もなく「ジコチュー」に行動しているというが、それは子どもを思い通りにしようとしてうまくいかず、育児を放棄した結果であるのかもしれない。その現実問題としての育児の困難さが少子化の一因であるともいわれている。

それでは、実際の子育ての現状はどのようなものであろうか。その現状を知る手がかりとして、今回は幼児をもつ母親を対象に調査を行なった結果から、育児上の「困難」に焦点をあてて検証することとする。

II. 調査の概要

1. 対象園

神奈川県横浜市の住宅街にある N 幼稚園および茨城県下妻市にある T 保育園。

2. 調査方法

N 幼稚園および T 保育園の協力を得て、園児の保護者に対し、日常の育児の状況や子どもの生活のようすについて質問紙法による調査を実施した。

質問紙の内容については、第 1 報の添付資料参照。

3. 調査時期

2007 年 12 月。

4. 回収率と回答者数

質問紙の配布部数は、N 幼稚園へ 450 部、T 保育園へ 90 部。回収率は N 幼稚園 75.6%、T 保育園 84.4%であった。このうち、園児の年齢が 3 歳から 6 歳であること、さらに母親によって回答されたものをデータとして使用することにした。その結果、N 幼稚園 294 名、T 保育園 60 名となって、有効回答率はそれぞれ 65.3%と 66.7%であった。

III. 調査の結果

1. 回答者（母親）の属性

(1) 母親の年齢

表 1 に示したように、N 幼稚園の母親は 30 歳代に 74.8%と集中しているのに対し、T 保育園の母親は 30 歳代が 55.0%であり、20 歳代と 40 歳代が N 幼稚園より多く、年代に幅がみられた。それは子どもの人数にも反映されていて、N 幼稚園では子ども 2 人という回答が 70.1%と最も多いが、T 保育園では 2 人は 51.3%、子ども 1 人と 3 人、4 人以上も N 幼稚園よりも多い割合であった（表 2）。

なお、今回の調査で各園に通う園児が 2 人以上いる場合は、年長の子どもの対象として回答を依頼した。各園の園児の男児女児別の構成は表 3 のとおりであった。

表 1 回答した母親の年齢

N(%)

	N 幼稚園	T 保育園	計
20 歳 代	11 (3.7)	12 (20.0)	23 (6.5)
30 歳 代	220 (74.8)	33 (55.0)	253 (71.5)
40 歳代以上	52 (17.7)	15 (25.0)	67 (18.9)
不 明	11 (3.7)	0	11 (3.1)
計	294 (100.0)	60 (100.0)	354 (100.0)

表 2 子どもの人数

N(%)

	N 幼稚園	T 保育園	計
1 人	55 (18.7)	15 (25.0)	70 (19.8)
2 人	206 (70.1)	31 (51.3)	237 (66.9)
3 人	30 (10.2)	11 (18.3)	41 (11.6)
4人以上	3 (1.0)	3 (5.0)	6 (1.7)
計	294 (100.0)	60 (100.0)	354 (100.0)

表 3 園児の年齢と性別

N(%)

		N 幼稚園	T 保育園	計
3 歳	男児	10 (3.5)	3 (5.2)	13 (3.8)
	女児	8 (2.8)	8 (13.8)	16 (4.7)
4 歳	男児	51 (17.8)	10 (17.2)	61 (17.7)
	女児	35 (12.2)	12 (20.7)	47 (13.7)
5 歳	男児	53 (18.5)	6 (10.3)	59 (17.2)
	女児	54 (18.9)	9 (15.5)	63 (18.3)
6 歳	男児	46 (16.1)	6 (10.3)	52 (15.1)
	女児	29 (10.1)	4 (6.9)	33 (9.6)
計		286 (100.0)	58 (100.0)	344 (100.0)

(2) 家族構成と住居形態

表 4 と表 5 に示したように、N 幼稚園は 95.9% の家庭が核家族であったが、T 保育園は 51.7% と約半数に留まり、拡大家族が 48.3% を占めた。住居形態も N 幼稚園の家庭は一戸建てに住んでいる割合が 29.5% であるのに対し、T 保育園では 86.7% であった。

つまり、N 幼稚園では核家族で集合住宅に住む家庭が多く、T 保育園では核家族と拡大家族が半々であり、一戸建て住宅に住んでいる割合が高いという違いがみられた。この違いは、地域差によると考えられる。

表 4 家族構成

N(%)

	N 幼稚園	T 保育園	計
核 家 族	281 (95.9)	31 (51.7)	312 (88.4)
拡大家族	12 (4.1)	29 (48.3)	41 (11.6)
計	293 (100.0)	60 (100.0)	353 (100.0)

表 5 住居形態

N(%)

	N 幼稚園	T 保育園	計
一戸建て	86 (29.5)	52 (86.7)	138 (39.2)
集合住宅 (1～3階)	159 (54.5)	7 (11.1)	166 (47.2)
集合住宅 (4階以上)	47 (16.1)	1 (1.7)	48 (13.6)
計	292 (100.0)	60 (100.0)	352 (100.0)

(3) 母親の自由時間

表 13 と表 14 の「全体」の欄には、園別に母親の自由時間の有無を示している。平日における母親の自由時間は「なし」という回答が N 幼稚園にやや多いものの、全体的にみると「1 時間以上」の自由時間があるとする回答が多く、T 保育園の母親よりも長い自由時間があるということになる。これは表 6 に示したように、N 幼稚園には仕事をもたない母親が 77.7% と多いという理由によると考えられる。

表 6 母親の職業の有無

N(%)

	N 幼稚園	T 保育園	計
あり	65 (22.3)	56 (93.3)	121 (34.4)
なし	227 (77.7)	4 (6.7)	231 (65.6)
計	292 (100.0)	60 (100.0)	352 (100.0)

しかし、休日になると、両園の母親とも自由時間「なし」とする回答が、N 幼稚園では 13.9% から 36.9% へ、T 保育園では 8.5% から 44.2% へと急増し、両園に差はみられない。子どもが休日になると、母親の自由時間は減少していることが分かる。

(4) 子どもと母親の起床時間および就寝時間

表 15 から表 22 の「全体」の欄には、平日・休日別に子どもと母親の起床時間および就寝時間を示した。これらの表から、平日は N 幼稚園の子どもよりも T 保育園の子どもの方が早寝早起きであることが分かる。T 保育園の母親は起床時間については、子どもと同じく早起きの傾向がみられた。しかし就寝時間については早寝の傾向がみられる一方で、「不定」とする回答も多かった。

平日・休日ともに、N 幼稚園の子どもの起床時間および就寝時間は、T 保育園の子どもよりも遅い傾向がみられるが、全体的には、平日の N 幼稚園児の 89.7%、T 保育園児の 98.4% が 21 時台までに就寝しており、遅くまで起きているのは N 幼稚園の一部の子どもであった。それは、生活のリズムが夜型になっている首都圏に同園が位置しているからかもしれない。

(5) 習い事の有無

表 23 の「全体」の欄には、園別に習い事の有無を示した。N 幼稚園では習い事をしている園児は 70.5%であり、習い事をしていないのは 29.5%であった。反対に T 保育園の園児で習い事をしているのは 27.6%にすぎない。この違いは、降園後に時間的余裕のある幼稚園児であるか、その時間がほとんどない保育園児であるかによると思われる。

習い事の内容については、N 幼稚園の園児はスイミングなどの体操教室が約半数を占め、次いで英会話等の学習教室が 23.6%であった。T 保育園では、習い事をする園児は少ないのだが、その中で英会話等の学習教室へ通う割合が 12.1%と、6.9%の体操教室よりも多かった。

(6) 子どもの状況

表 7 に示したように、「子どもがいきいきしている時」は、両園とも「友達と遊んでいる時」が最も多く、両園をあわせると 90.7%にものぼる。次いで「何かができるようになった時」64.4%、「親と遊んでいる時」53.7%と続いた。また「子どもの感情がほとぼしり出る時」については、表 11 の「全体」の欄に示したとおり、最も多いのは両園ともプラスの感情の「楽しくてしかたがない時」で 84.7%であった。マイナスの感情については、N 幼稚園では「親に叱られた時」が 49.0%と多く、T 保育園では「眠い時や体調不良の時」48.3%、「何かを我慢させられた時」が 45.0%と多かった。

表 7 子どもがいきいきしている時 (複数回答) N(%)

	N 幼稚園	T 保育園	計
親 と 遊 ん で い る 時	166 (56.5)	24 (40.0)	190 (53.7)
友 達 と 遊 ん で い る 時	275 (93.5)	46 (76.7)	321 (90.7)
一 人 で 遊 ん で い る 時	57 (19.4)	10 (16.7)	67 (18.9)
欲しいものを買って貰った時	106 (36.1)	9 (15.0)	115 (32.5)
何かができるようになった時	191 (65.0)	37 (61.7)	228 (64.4)
特 に 気 づ か な い	0	1 (1.7)	1 (0.3)
そ の 他	23 (7.8)	8 (13.3)	31 (8.8)
回答者数	294	60	354

表 12 の「全体」の欄には、子どもの感情表出の手段を示した。最も多かったのはプラスの感情表出で「声を出して笑う」79.6%であり、N 幼稚園ではこれに「踊る」が加わる。マイナ

スの感情表出は、両園をあわせて「ぐずぐず泣く」45.3%、「泣き叫ぶ」43.1%が多かった。

なお、「子どもがいきいきしている時」、「子どもの感情がほとばしり出る時」、「子どもの感情表出」には複数回答を求めたが、どの質問にもT保育園よりもN幼稚園の母親の方が多くの選択肢を選ぶ傾向がみられたため、集計結果の割合が高くなっている。

2. 母親の育児に対する感情

(1) 育児上でうれしさを感じる時

表8には、「育児上でうれしさを感じる時」の集計結果を示した。最も多いのは「成長がみられた時」で、N幼稚園92.5%、T保育園96.7%であった。次いで「子どもに新しい発見をした時」で、N幼稚園83.3%、T保育園76.7%であった。これらは共に、子どもが成長して発達のあとを裏づけるように能力の伸びを示したことを喜んでいるのである。

それに続いて「愛らしい顔を見る時」がN幼稚園81.3%、T保育園75.0%であり、次に「慕ってくれる時」がN幼稚園67.0%、T保育園60.0%であった。

後述の「育児上の不安やいらだち」の結果と関係してくるのだが、「素直にいうことをきく時」を喜ぶのは、N幼稚園25.5%、T保育園25.0%と少数であった。

表8 育児上でうれしさを感じる時（複数回答） N(%)

	N 幼稚園	T 保育園	計
静かに一人遊びしている時	47 (16.0)	8 (13.3)	55 (15.5)
素直にいうことをきく時	75 (25.5)	15 (25.0)	90 (25.4)
慕 っ て く れ る 時	197 (67.0)	36 (60.0)	233 (65.8)
成 長 が み ら れ た 時	272 (92.5)	58 (96.7)	330 (93.2)
愛 ら し い 顔 を み る 時	239 (81.3)	47 (78.3)	286 (80.8)
よその人にほめられた時	105 (35.7)	20 (33.3)	125 (35.3)
子どもに新しい発見をした時	245 (83.3)	46 (76.7)	291 (82.2)
特 に な し	0	0	0
そ の 他	27 (9.2)	3 (5.0)	30 (8.5)
回 答 者 数	294	60	354

(2) 育児上で不安やいらだちを感じる時

表9には、母親が育児で不安やいらだちを感じる時について調べた結果を示した。最も多かったのは「子どもがいうことをきかない時」であり、N幼稚園66.9%、T保育園54.2%であった。次は、N幼稚園が「子どもがのろのろしている時」31.7%、T保育園が「子どもの気持ちが分らない時」35.6%という結果であった。

その一方で、不安やいらだちは「特になし」という回答が、わずかではあるがN幼稚園3.4%、T保育園8.5%みられた。

表9 育児上で不安やいらだちを感じる時（複数回答）

N(%)

	N 幼稚園					T 保育園					計
	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児	計	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児	計	
育児全般に自信がもてない時	9 (50.0)	20 (23.3)	28 (26.2)	14 (18.7)	72 (24.6)	0	5 (23.8)	5 (33.3)	2 (20.0)	12 (20.3)	84 (23.9)
子どもの気持ちが分からない時	10 (55.6)	23 (26.7)	28 (26.2)	18 (24.0)	81 (27.6)	5 (45.5)	8 (38.1)	5 (33.3)	2 (20.0)	21 (35.6)	102 (29.0)
子どもがのろのろしている時	4 (22.2)	29 (33.7)	39 (36.4)	19 (25.3)	93 (31.7)	2 (18.2)	43 (19.0)	2 (13.3)	4 (40.0)	12 (20.3)	105 (29.8)
子どもがいうことをきかない時	15 (88.3)	60 (66.8)	65 (60.7)	51 (68.0)	196 (66.9)	8 (72.7)	11 (52.4)	9 (60.6)	3 (30.0)	32 (54.2)	228 (64.8)
育児書どおりにいかない時	1 (5.6)	1 (1.2)	0	1 (1.3)	3 (1.0)	0	0	0	0	0	3 (0.9)
他子との比較で発達が遅い時	1 (5.6)	8 (9.3)	16 (15.0)	10 (13.3)	36 (12.3)	0	1 (4.8)	1 (6.7)	2 (20.0)	4 (6.8)	40 (11.4)
他人から育児で注意された時	3 (16.7)	8 (9.3)	24 (22.4)	13 (17.3)	50 (17.1)	1 (9.1)	4 (19.0)	1 (6.7)	2 (20.0)	9 (15.3)	59 (16.8)
パートナーの無関心や不参加	5 (27.8)	26 (30.2)	25 (23.4)	21 (28.0)	80 (27.3)	2 (18.2)	2 (9.5)	4 (26.7)	4 (40.0)	12 (20.3)	92 (26.1)
特になし	0	3 (3.5)	4 (3.7)	3 (4.0)	10 (3.4)	0	2 (9.5)	2 (13.3)	1 (10.0)	5 (8.5)	15 (4.3)
その他	1 (5.6)	8 (9.3)	11 (10.3)	5 (8.9)	26 (8.9)	3 (27.3)	2 (9.5)	0	1 (10.0)	6 (10.2)	32 (9.1)
回答者数	18	86	107	75	293	11	21	15	10	59	352

この不安やいらだちの割合は、子どもの年齢によって変化している。「子どもがいうことをきかない時」は3歳児に多いし、「育児全般に自信が持てない時」や「子どもの気持ちが分からない時」は子どもの年齢が低いほど多くなっている。反対に「よその子と比較して発達が遅いのではないかと思う時」は年齢が高くなるほど増えている。

育児上の不安やいらだちへの対応の方法については、表10の「全体」の欄に示した。「夫や親に話を聞いてもらう」「友達とおしゃべりをする」が多く、両園あわせると70%以上を占めている。次に割合は少なくなるが、N幼稚園では「子どもにあたる」18.5%、「育児書やインターネットで答を探す」16.4%、「何もせず、そのうち忘れる」13.6%であった。T保育園も同じ項目が選ばれているが、その割合はいずれもN幼稚園よりも低かった。

Ⅲ. 考 察

今回、N幼稚園とT保育園で調査を行なった。N幼稚園は首都圏の住宅街にあり、家庭のほとんどが核家族で集合住宅に住む割合が高い。N幼稚園の子どもは大部分は早寝早起きであるが、一部の子どもに夜型の都会の生活リズムが反映しているのか、夜遅くまで起きている子どもと朝

起きるのが遅い子どもがみられた。T 保育園では、母子ともほとんどが早寝早起きであるといえる。生活の背景が異なる2つの園で得られた結果を比較しながら考察を進める。

1. 育児を困難にしているもの

母親が「育児上で不安やいらだちを感じる時」は、「子どもが言うことをきかない時」が最も多かった。そこで、ここでは「言うことをきかない」ことを育児上の困難を示す1つの指標とし、その回答者を「言うことをきかない」群とした。他方、不安やいらだちは「特になし」の回答者を「特になし」群として、比較をすることにした。ただし「特になし」の回答者は極端に少ないため、統計的な比較は行なっていない。

(1) 子どもにあたる

表10から、N 幼稚園の回答者は「言うことをきかない」ことへの対応として「子どもにあたる」割合が高いことが分る。「特になし」群で「子どもにあたる」という回答は皆無であった。

結果の項で述べたように、「子どもが素直に言うことをきく時」にうれしさを感じる母親は少ないのだが、「言うことをきかない」とイライラして子どもにあたる母親は多いのである。この結果から、母親には「子どもは親に従うのが当然」という思いがあるのかもしれないと推測される。長谷川が心配しているように「強制的に従わせよう」としているとするなら、その行為は子どもの主体性をそこない、母親にとっては育児を困難なものにしていると考えられる。

表10 育児上の困難（複数回答の一部）その対応

N(%)

	N 幼稚園			T 保育園			計
	言うことをきかない	特になし	全体	言うことをきかない	特になし	全体	
夫や親に話を聞いてもらう	157 (80.5)	4 (80.0)	228 (79.4)	22 (68.8)	2 (50.0)	35 (59.3)	263 (76.0)
友達とおしゃべりをする	149 (76.4)	2 (40.0)	215 (74.9)	20 (62.5)	2 (50.0)	37 (64.4)	253 (73.1)
育児書やネットで答を探す	32 (16.4)	1 (20.0)	47 (16.4)	4 (12.5)	0	6 (10.2)	53 (15.3)
電話相談などを利用する	3 (1.5)	0	8 (2.8)	1 (3.1)	0	1 (1.7)	9 (2.6)
子どもにあたる	46 (23.6)	0	53 (18.5)	4 (12.5)	0	4 (6.8)	57 (16.5)
何もせず、そのうち忘れる	30 (15.4)	1 (20.0)	39 (13.6)	3 (9.4)	0	4 (6.8)	43 (12.4)
何もせず、あれこれ悔やむ	4 (2.1)	0	6 (2.1)	1 (3.1)	0	2 (3.4)	8 (2.3)
その他	9 (4.6)	0	19 (6.6)	2 (6.3)	0	6 (10.2)	25 (7.2)
回答者数	195	5	287	32	4	59	346

(2) 子どもの感情表出

表 11 と表 12 にあるように、子どもの感情のほとばしりは「楽しくて仕方がない時」に多く、その感情は「声を出して笑う」という表出が多かった。これは、両園とも「言うことをきかない」群と「特になし」群間に差はみられなかった。多くの子ども達が楽しく笑いながら過ごしていることが伺える。反対にマイナスの感情は「親に叱られた時」「何かを我慢させられた時」「眠い時や体調不良の時」にほとばしり出るが、このような時には子ども達が感情的になったりするのは当然のことであろう。

表 11 子どもの感情がほとばしり出る時（複数回答）

と育児上の困難（複数回答の一部）

N(%)

	N 幼稚園			T 保育園			計
	言うことをきかない	特になし	全体	言うことをきかない	特になし	全体	
楽しくて仕方がない時	176 (89.8)	8 (80.0)	259 (88.1)	19 (59.4)	5 (100)	41 (68.3)	300 (84.7)
エネルギーが余っている時	63 (32.1)	2 (20.0)	91 (31.0)	4 (12.5)	1 (20.0)	10 (16.7)	101 (28.5)
何かを我慢させられた時	74 (37.8)	0	93 (31.6)	12 (37.5)	4 (80.0)	27 (45.0)	120 (33.9)
遊びを中断させられた時	54 (27.6)	0	71 (24.1)	5 (15.6)	0	12 (20.0)	83 (23.4)
自尊心を傷つけられた時	53 (27.0)	2 (20.0)	81 (27.6)	6 (18.8)	0	11 (18.3)	92 (26.0)
親に叱られた時	102 (52.0)	4 (40.0)	144 (49.0)	11 (34.4)	2 (40.0)	23 (38.3)	167 (47.2)
自分のペースが乱された時	22 (11.2)	0	31 (10.5)	5 (15.6)	0	7 (11.7)	38 (10.7)
眠い時や体調不良の時	72 (36.7)	2 (20.0)	101 (34.4)	17 (53.1)	3 (60.0)	29 (48.3)	130 (36.7)
親に構ってもらえない時	29 (14.8)	2 (20.0)	41 (13.9)	8 (25.0)	3 (60.0)	17 (28.3)	58 (16.4)
気持ちを理解されない時	74 (37.8)	4 (40.0)	107 (36.4)	12 (37.5)	2 (40.0)	23 (38.3)	130 (36.7)
その他	13 (6.6)	0	19 (6.5)	0	0	1 (1.7)	20 (5.6)
特になし	0	0	0	0	0	1 (1.7)	1 (0.3)
回答者数	195	5	294	32	5	60	354

しかし、N 幼稚園の場合、「言うことをきかない」群の方が「特になし」群よりも「ぐずぐず泣く」「泣き叫ぶ」「文句を言う」などの感情表出が多かったのである。この結果は、母親が言うことをきかせようと強制するから子どもが感情的になっている可能性がある。また「特になし」群では、母親がイライラすることがないから子どもにマイナスの感情表出が少ない

とも考えられる。ただし、幼児の場合はマイナスの感情表出が少なければ、それでよいとも言いきれない。長谷川のいうように、子どもの感情が押さえつけられている可能性も皆無ではないからである。

いずれにしても、子どもへの過度の強制は、育児を困難なものにしているといえよう。

表 12 子どもの感情表出（複数回答）と育児上の困難（複数回答の一部） N(%)

	N 幼稚園			T 保育園			計
	言うことを きかない	特になし	全体	言うことを きかない	特になし	全体	
声を出して笑う	165 (84.6)	8 (80.0)	239 (81.6)	19 (59.4)	5 (100)	42 (70.0)	281 (79.6)
とめどもなく しゃべる	78 (40.0)	3 (30.0)	107 (36.5)	4 (12.5)	1 (20.0)	9 (15.0)	161 (32.9)
踊る	78 (40.0)	4 (40.0)	122 (41.6)	4 (12.5)	1 (20.0)	11 (18.3)	133 (37.7)
ぐずぐず泣く	83 (42.6)	3 (30.0)	132 (45.1)	15 (46.9)	4 (80.0)	28 (46.7)	160 (45.3)
泣き叫ぶ	95 (48.7)	3 (30.0)	125 (42.7)	16 (50.0)	1 (20.0)	27 (45.0)	152 (43.1)
文句を言う	75 (38.5)	2 (20.0)	101 (34.5)	10 (31.3)	1 (20.0)	15 (25.0)	116 (32.9)
叩く・ける・ つねる	35 (17.9)	0	49 (16.7)	6 (18.8)	1 (20.0)	13 (21.7)	62 (17.6)
物を投げる・ 八当たりをする	32 (16.4)	0	40 (13.7)	6 (18.8)	0	10 (16.7)	50 (14.2)
人をかむ	2 (1.0)	0	2 (0.7)	0	1 (20.0)	3 (5.0)	5 (1.4)
地団太を踏む	37 (19.0)	2 (20.0)	53 (18.1)	4 (12.5)	0	6 (10.0)	59 (16.7)
その他	12 (6.2)	1 (10.0)	20 (6.8)	1 (3.1)	0	3 (5.0)	23 (6.5)
回答者数	195	10	293	32	5	60	353

(3) 母親の自由時間

人間は誰でも、時間的なゆとりがあれば、イライラする可能性は減る。そこで、2群別に母親の自由時間の関係を検証した。その結果が、表13と表14であるが、今回の調査結果では、休日に母親の自由時間が少なくなるということは分かったが、育児上でイライラすることに両群間に明らかな違いを見ることはできなかった。

(4) 生活習慣

今回、母親と子どもの起床時間と就寝時間を取り上げて、生活習慣をあらわす指標とした。結果の項で述べたように、N 幼稚園は一部の母子に遅寝遅起きがみられたが、T 保育園には少ない。

表 13 平日・母親の自由時間と育児上の困難（複数回答の一部）

N(%)

	N 幼稚園			T 保育園			計
	言うことを きかない	特に なし	全体	言うことを きかない	特に なし	全体	
なし	24 (12.2)	2 (20.0)	41 (13.9)	3 (9.7)	2 (40.0)	5 (8.5)	46 (13.0)
30分以内	15 (7.7)	1 (10.0)	21 (7.1)	4 (12.9)	2 (40.0)	11 (18.6)	32 (9.1)
30分～1時間	50 (25.5)	1 (10.0)	67 (22.8)	14 (45.2)	0	22 (37.3)	89 (25.2)
1～3時間	56 (28.6)	3 (30.0)	90 (30.6)	7 (22.6)	0	16 (27.1)	106 (30.0)
3時間以上	51 (26.0)	3 (30.0)	75 (25.5)	3 (9.7)	1 (20.0)	5 (8.5)	80 (22.7)
回答者数	196	10	294	31	5	59	353

表 14 休日・母親の自由時間と育児上の困難（複数回答の一部）

N(%)

	N 幼稚園			T 保育園			計
	言うことを きかない	特に なし	全体	言うことを きかない	特に なし	全体	
なし	69 (38.1)	2 (25.0)	100 (36.9)	10 (38.5)	2 (50.0)	23 (44.2)	123 (38.1)
30分以内	20 (11.0)	0	31 (11.4)	3 (11.5)	0	7 (13.5)	38 (11.8)
30分～1時間	41 (22.7)	1 (12.5)	60 (22.1)	3 (11.5)	1 (25.0)	5 (9.6)	65 (20.1)
1～3時間	40 (22.1)	3 (37.5)	56 (20.7)	8 (30.8)	0	12 (23.1)	68 (21.1)
3時間以上	11 (6.1)	2 (25.0)	24 (8.9)	2 (7.7)	1 (25.0)	5 (9.6)	29 (9.0)
回答者数	181	8	271	26	4	52	323

表 15～表 22 をみると、両園とも、平日に子どもの早寝早起が多いのは、「言うことをきかない」群より「特になし」群である。平日の母親については、N 幼稚園の場合、子どもと同様に早寝早起であるが、T 保育園では「特になし」群の就寝時間をみると早寝であるとは言えない。ただし 5 名のみの回答である。休日になると、母子とも起床時間と就寝時間も平日よりも遅くなる傾向がみられるが、それでもやはり「特になし」群の子どもは早寝早起である。また、休日の母親も「特になし」群の起床時間は早い。

このように、子どもに早寝早起の生活習慣が身についていると、起床や就寝についてあれこれ言わなくても済むためか、母親の育児上の困難は「特になし」となったり、「言うことをきかない」割合が少なくなったりしている。

早寝早起の生活習慣を身につけさせることは「しつけ」の一環であるが、これは長谷川のい

う「強制的なしつけ」とは異なるものである。子どもの「主体性」に任せて遅寝遅起きを認めることは、子どもが自分自身を律する「主体性」を育てることにはつながらず、育児上の困難を増していることにつながっていると考えられる。

表 15 平日・子どもの起床時間と育児上の困難（複数回答の一部） N(%)

	N 幼稚園			T 保育園			計
	言うことを きかない	特に なし	全体	言うことを きかない	特に なし	全体	
6 時台	41 (20.9)	4 (40.0)	68 (23.1)	15 (50.0)	2 (40.0)	25 (43.1)	93 (26.4)
7 時台	136 (69.4)	6 (60.0)	196 (66.7)	15 (50.0)	3 (60.0)	33 (56.9)	229 (65.1)
8 時台	19 (9.7)	0	29 (9.9)	0	0	0	29 (8.2)
9 時台	0	0	1 (0.3)	0	0	0	1 (0.3)
回答者数	196	10	294	30	5	58	352

表 16 平日・子どもの就寝時間と育児上の困難（複数回答の一部） N(%)

	N 幼稚園			T 保育園			計
	言うことを きかない	特に なし	全体	言うことを きかない	特に なし	全体	
20 時台	72 (36.7)	4 (40.0)	103 (35.0)	11 (35.5)	2 (40.0)	18 (30.5)	121 (34.3)
21 時台	107 (54.6)	6 (60.0)	163 (55.4)	20 (64.5)	3 (60.0)	40 (67.8)	203 (57.5)
22 時台	17 (8.7)	0	27 (9.2)	0	0	1 (1.7)	28 (7.9)
不 定	0	0	1 (0.3)	0	0	0	1 (0.3)
回答者数	196	10	294	31	5	59	353

表 17 平日・母親の起床時間と育児上の困難（複数回答の一部） N(%)

	N 幼稚園			T 保育園			計
	言うことを きかない	特に なし	全体	言うことを きかない	特に なし	全体	
5 時台	34 (17.3)	6 (60.0)	56 (19.0)	11 (35.5)	2 (40.0)	17 (28.8)	73 (20.7)
6 時台	120 (61.2)	4 (40.0)	181 (61.6)	19 (61.3)	2 (40.0)	38 (64.4)	219 (62.0)
7 時台	41 (20.9)	0	55 (18.7)	1 (3.2)	1 (20.0)	4 (6.8)	59 (16.7)
8 時台	1 (0.5)	0	2 (0.7)	0	0	0	2 (0.6)
回答者数	196	10	294	31	5	59	353

表 18 平日・母親の就寝時間と育児上の困難（複数回答の一部）

N(%)

	N 幼稚園			T 保育園			計
	言うことを きかない	特に なし	全体	言うことを きかない	特に なし	全体	
21 時台	12 (6.3)	0	18 (6.3)	4 (13.8)	0	6 (10.5)	24 (7.0)
22 時台	24 (12.6)	1 (10.0)	38 (13.2)	6 (20.7)	1 (20.0)	11 (19.3)	49 (14.2)
23 時台	66 (34.6)	4 (40.0)	99 (34.4)	14 (48.3)	0	18 (31.6)	117 (33.9)
24 時台	65 (34.0)	5 (50.0)	98 (34.0)	2 (6.9)	0	6 (10.5)	104 (30.1)
1 時台	22 (11.5)	0	31 (10.8)	0	2 (40.0)	8 (14.0)	39 (11.3)
不 定	2 (1.0)	0	4 (1.4)	3 (10.3)	2 (40.0)	8 (14.0)	12 (3.5)
回答者数	191	10	288	29	5	57	345

表 19 休日・子どもの起床時間と育児上の困難（複数回答の一部）

N(%)

	N 幼稚園			T 保育園			計
	言うことを きかない	特に なし	全体	言うことを きかない	特に なし	全体	
6 時台	14 (7.1)	1 (10.0)	24 (8.2)	4 (12.9)	1 (20.0)	8 (13.6)	32 (9.1)
7 時台	91 (46.4)	5 (50.0)	139 (47.3)	16 (51.6)	2 (40.0)	32 (54.2)	171 (48.4)
8 時台	75 (38.3)	4 (40.0)	112 (38.1)	11 (35.5)	1 (20.0)	17 (28.8)	129 (36.5)
9 時台	14 (7.1)	0	17 (5.8)	0	1 (20.0)	2 (3.4)	19 (5.4)
10 時台	2 (1.0)	0	2 (0.7)	0	0	0	2 (0.6)
回答者数	196	10	294	31	5	59	353

表 20 休日・子どもの就寝時間と育児上の困難

N(%)

	N 幼稚園			T 保育園			計
	言うことを きかない	特に なし	全体	言うことを きかない	特に なし	全体	
20 時台	43 (22.1)	3 (30.0)	65 (22.2)	7 (23.3)	2 (40.0)	12 (20.7)	77 (21.9)
21 時台	125 (64.1)	5 (50.0)	176 (60.1)	21 (70.0)	3 (60.0)	41 (70.7)	217 (61.8)
22 時台	24 (12.3)	2 (20.0)	47 (16.0)	0	0	3 (5.2)	50 (14.2)
23 時台	2 (1.0)	0	3 (1.0)	0	0	0	3 (0.9)
不 定	1 (0.5)	0	2 (0.7)	2 (6.7)	0	2 (3.4)	4 (1.1)
回答者数	195	10	293	30	5	58	351

表 21 休日・母親の起床時間と育児上の困難（複数回答の一部）

N(%)

	N 幼稚園			T 保育園			計
	言うことを きかない	特になし	全体	言うことを きかない	特になし	全体	
5 時台	5 (2.6)	0	8 (2.7)	4 (12.9)	2 (40.0)	7 (11.9)	15 (4.3)
6 時台	17 (8.7)	0	29 (9.9)	11 (35.5)	0	17 (28.8)	46 (13.1)
7 時台	95 (48.7)	6 (60.0)	149 (51.0)	10 (32.3)	2 (40.0)	23 (39.0)	172 (49.0)
8 時台	64 (32.8)	4 (40.0)	89 (30.5)	5 (16.1)	0	9 (15.3)	98 (27.9)
9 時台	10 (5.1)	0	13 (4.5)	1 (3.2)	1 (20.0)	2 (3.4)	15 (4.3)
10 時台	3 (1.5)	0	3 (1.0)	0	0	1 (1.7)	4 (1.1)
不 定	1 (0.5)	0	1 (0.3)	0	0	0	1 (0.3)
回答者数	195	10	292	31	5	59	351

表 22 休日・母親の就寝時間と育児上の困難（複数回答の一部）

N(%)

	N 幼稚園			T 保育園			計
	言うことを きかない	特になし	全体	言うことを きかない	特になし	全体	
21 時台	14 (7.4)	0	23 (8.0)	2 (6.7)	2 (40.0)	5 (8.6)	28 (8.1)
22 時台	14 (7.4)	1 (10.0)	26 (9.1)	6 (20.0)	1 (20.0)	11 (19.0)	37 (10.8)
23 時台	73 (38.6)	3 (30.0)	103 (36.0)	14 (46.7)	0	19 (32.8)	122 (35.5)
24 時台	62 (32.8)	4 (40.0)	94 (32.9)	2 (6.7)	0	6 (10.3)	100 (29.1)
1 時台	20 (10.6)	1 (10.0)	30 (10.5)	1 (3.3)	2 (40.0)	9 (15.5)	39 (11.3)
不 定	6 (3.2)	1 (10.0)	10 (3.5)	5 (16.7)	0	8 (13.8)	18 (5.2)
回答者数	189	10	286	30	5	58	344

(5) 子どもの習い事と遊び

習い事の有無に関しては、N 幼稚園で「特になし」群に習い事をする子どもが多かったが、「言うことをきかない」群との間に大きな違いは見られなかった（表 23）。

表 24 と表 25 において、子どもがよくする遊びを比較すると、平日の N 幼稚園の「特になし」群は、「テレビ視聴」が少なく「戸外あそび」が多い傾向がみられた。ただし、休日には、その差はなくなる。

表 23 子どもの習い事の有無と育児上の困難（複数回答の一部）

N(%)

		N 幼稚園			T 保育園			計
		言うことを きかない	特に なし	全体	言うことを きかない	特に なし	全体	
あり・ 複数 回答	スイミング 体 操 等	93 (48.4)	7 (70.0)	145 (50.3)	2 (6.7)	0	4 (6.9)	149 (43.1)
	ピアノ等 音楽教室	44 (22.9)	1 (10.0)	61 (21.2)	4 (13.3)	0	6 (10.3)	67 (19.4)
	絵画教室	3 (1.6)	2 (20.0)	5 (1.7)	1 (3.3)	0	1 (1.7)	6 (1.7)
	英会話等 学習教室	39 (20.3)	4 (40.0)	68 (23.6)	4 (13.3)	1 (20.0)	7 (12.1)	75 (21.7)
	そ の 他	15 (7.8)	1 (10.0)	25 (8.7)	2 (6.7)	0	3 (5.2)	28 (8.1)
	なし	62 (32.3)	2 (20.0)	85 (29.5)	21 (70.0)	4 (80.0)	42 (72.4)	127 (36.7)
回答者数		192	10	288	30	5	58	346

表 24 平日・園児がよくする遊び（複数回答）と育児上の困難（複数回答の一部） N(%)

		N 幼稚園			T 保育園			計
		言うことを きかない	特に なし	全体	言うことを きかない	特に なし	全体	
玩 具 ・ ご っ こ 遊 び		92 (48.4)	4 (44.4)	126 (44.7)	13 (43.3)	0	22 (40.7)	148 (44.0)
絵 本		8 (4.2)	0	12 (4.3)	5 (16.7)	0	11 (20.4)	23 (6.8)
お 絵 か き ・ 工 作		38 (20.0)	0	55 (19.5)	9 (30.0)	0	14 (25.9)	69 (20.5)
コ ン プ ュ ー タ 遊 び		3 (1.6)	0	6 (2.1)	1 (3.3)	1 (25.0)	3 (5.6)	9 (2.7)
テ レ ビ 視 聴		148 (62.1)	3 (33.3)	174 (61.7)	21 (70.0)	3 (75.0)	35 (64.8)	209 (62.2)
ビ デ オ 視 聴		35 (18.4)	2 (22.2)	50 (17.7)	6 (20.0)	1 (25.0)	9 (16.7)	59 (17.6)
戸 外 遊 び		53 (27.9)	5 (55.6)	84 (29.8)	3 (10.0)	1 (25.0)	8 (14.8)	92 (27.4)
室内運動遊び		20 (10.5)	3 (33.3)	37 (13.1)	4 (13.3)	0	5 (9.3)	42 (12.5)
そ の 他		4 (2.1)	0	6 (2.1)	2 (6.7)	0	3 (5.6)	9 (2.7)
回答者数		190	9	282	30	4	54	336

表 25 休日・園児がよくする遊び（複数回答）と育児上の困難（複数回答の一部）N(%)

	N 幼稚園			T 保育園			計
	言うことを きかない	特に なし	全体	言うことを きかない	特に なし	全体	
玩具・ ごっこ遊び	97 (52.4)	5 (50.0)	133 (48.0)	13 (41.9)	1 (25.0)	21 (36.8)	154 (46.1)
絵本	6 (3.2)	0	7 (2.5)	3 (9.7)	0	6 (10.5)	13 (3.9)
お絵かき・ 工 作	30 (16.2)	0	42 (15.2)	8 (25.8)	0	11 (19.3)	53 (15.9)
コンピュータ 遊 び	5 (2.7)	0	7 (2.5)	1 (3.2)	0	1 (1.8)	8 (2.4)
テレビ視聴	114 (61.6)	4 (40.0)	166 (59.9)	19 (61.3)	2 (50.0)	33 (57.9)	199 (59.6)
ビデオ視聴	31 (16.8)	2 (20.0)	49 (17.7)	5 (16.1)	2 (50.0)	11 (19.3)	60 (18.0)
戸外遊び	112 (60.5)	6 (60.0)	177 (63.9)	17 (54.8)	2 (50.0)	29 (50.9)	206 (61.7)
室内運動遊び	27 (14.6)	1 (10.0)	42 (15.2)	7 (22.6)	1 (25.0)	11 (19.3)	53 (15.9)
そ の 他	9 (4.9)	0	14 (5.1)	3 (9.7)	0	5 (8.8)	19 (5.7)
回答者数	185	10	277	31	4	57	334

2. 育児上で重視するもの

母親は、育児上でうれしさを感じることに「愛らしい顔をみる時」「慕ってくれる時」をあげ、子どもの存在そのものや親との関係に愛情が表現されることに喜びを感じているが、それ以上に「成長がみられた時」や「子どもに新しい発見をした時」にうれしさを感じているのである。

子どもがいきいきとしているのは、「友達と遊んでいる時」という回答が多かったが、筆者らが前報（2006）で報告したように、実際には降園後、友達と遊ぶことは少ない。実態としては、幼稚園児は降園後70%の子どもが習い事をしており、その種目で多いのはスイミング等の体操教室と英会話等の学習教室であった。これらの習い事は、子どもの能力を伸ばしたいという親心から始まっていると思われるが、鯨岡や長谷川が指摘するように、子どもの主体性を育てるよりも社会の中で優位に立てるようにという思いに引きずられて、子どもを追い詰めてしまうことがあるかもしれない。さらに、「子どもがのろのろしている時」を育児上の不安やいらだちの原因としてあげているのも、「より早い行動」「よりよい発達」を求めた結果として、子どもを追い詰めているからかもしれない。

3. 要約と今後の課題

「子どもが言うことをきかない」という項目を、育児上の困難さを表す1つの指標として、子

どもの生活のようすとの関係を検証したところ、困難が「特になし」群は、子どもが「言うことをきかない」とする群よりも、親が子どもにあたったりする割合が少ないこと、子どものマイナス感情表出が少ないこと、子どもに早寝早起きの生活習慣が身についていること、平日に戸外遊びが多い状況にあること等が示唆された。

つまり「子どもに言うことをきかせよう」とすると、子どもとの間に軋轢が起こり、育児上の困難さが増すと考えられるのである。さらに、早寝早起きや戸外遊びの習慣を身につけさせることは、子どもを追い詰めるしつけではなく、子どもが自分自身を律するのに必要な生活習慣であり、育児上の困難さを減少させるものとして推測される。一方で、子どもの年齢によって困難さの内容に変化が生じることについては、鯨岡のいう母親の成熟が感じられる。

母親の自由時間の有無、子どもの習い事の有無、子どもの人数、家族形態の違いなどには、育児上の困難さとの関連を見ることはできなかった。

今後の課題として、母親は子どもの主体性と社会性のどちらに重きをおいて育児をしようとしているのか、また「特になし」群は、本当に育児上の困難を感じていないのか、具体的な調査と検証があげられる。

引用・参考文献

- 窪龍子・井狩芳子・野田耕、2005「幼児の心身の健康に関する研究－幼稚園児と保育園児の遊びの調査（1）」『実践女子大学人間社会学部紀要第一集』
- 窪龍子・井狩芳子・野田耕、2006「幼児の心身の健康に関する研究－幼稚園児と保育園児の遊びの調査（2）」『実践女子大学人間社会学部紀要第二集』
- 窪龍子・井狩芳子・野田耕、2007「幼児期の生活と遊びに関する研究－幼稚園児の降園語の遊びから「三間がない現象」について－」『実践女子大学人間社会学部紀要第三集』
- 鯨岡峻 1999 『関係発達論の展開』ミネルヴァ書房
- 鯨岡峻・鯨岡和子 2001 『保育を支える発達心理学』ミネルヴァ書房
- 鯨岡峻 2002 『育てられる者から育てる者へ』NHK ブックス 938 日本放送協会
- 長谷川一博 2005『お母さんはしつけをしないで』草想社
- 石川結貴 2007『モンスター・マザー 世界は「わたし」で回っている』光文社

付記：今回の調査にご協力下さったN幼稚園とT保育園の関係各位と保護者の方々に心よりの謝意を表する。